

ヤマト福祉財団 NEWS

ヤマトグループ賛助会員向けニュース（季刊）

発行部数12万部・非売品

YAMATO WELFARE FOUNDATION

No.49

1月20日発行 2016 Winter

第16回ヤマト福祉財団 小倉昌男賞 贈呈式

『自分らしい
暮らし』を支えて、
人や土地の
元気を取り戻す——。

第16回 ヤマト福祉財団小倉昌男賞 贈呈式

主催 公益財団法人ヤマト福祉財団



写真前列左より受賞された林氏令夫人、林 博文さん、西谷久美子さん、花田春兆さん、花田さんご子息。後列左より森下明利ヤマトグループ企業労働組合連合会会長、木川 真ヤマトホールディングス株式会社代表取締役会長、瀬戸 薫ヤマト福祉財団理事長、山内雅喜ヤマトホールディングス株式会社代表取締役社長、神田晴夫ヤマトホールディングス株式会社代表取締役副社長、長尾 裕ヤマト運輸株式会社代表取締役社長

私たちの賛助会費が活かされています

■障がい者給料増額支援助成金

助成先レポートVol.25（千葉県木更津市）

お客様にとって当たり前の
居心地のいいカフェであること p8

この街で、一緒に生きていく。障がい者のクロネコDM便配達事業

歩いた距離だけ、
町にとけ込んでいく。..... p10

【水稻自然栽培チャレンジで給料アップ】

障がいのある方が農業再生の原動力に p12

『自分らしい暮らしを支えて、人や土地の元気を取り戻す』。

2015年12月3日／東京・日本工業倶楽部



「25年にわたって、ともに支え合った〈はる〉の利用者と職員、障がい団体や地域のみなさま、そして夫と子どもたちに心から感謝し、ともに喜びを分かち合いたい」西谷久美子さん

「障がい者が働くことを家族でさえ想像できない時代があった。だから今、〈はる〉で働いている方はもちろん、彼らを取り巻く家族のうれしさも深く感じます」西谷さんを推薦した、有限会社まるのみ刺繍プリントセンター代表取締役で東京中小企業家同友会 理事 障害者委員長の三嶋岐子さん



「西谷さんは134人の利用者に高水準の工賃を給付している実績に納得。林さんは農福連携という枠を超えた新しい境地を期待させます。そして、花田春兆さんは日本の宝だと思います」選考委員を代表して、きょうされん 専務理事・藤井克徳さん

■今回は3名の受賞者

仕事づくりや労働条件の改善など、障がい者の経済的自立に尽力し、その生活向上に多大なる成果を上げた方にエールを贈る「ヤマト福祉財団 小倉昌男賞」。今回はお二人の開拓者とともに、もうおひと方、8年ぶりに「特別賞」が設けられ、3名の受賞者が登壇しました。

本賞に輝いたのはまず、東京の世田谷区で25年にわたり、精神障がい者の働く場づくりに邁進されてきた西谷（にしや）久美子さん。〈社会福祉法人はる〉の常務理事です。そしてもうお一人は、福井県は坂井市、あわら市にまたがる坂井北部丘陵地で、主にナシ、ブドウといった果樹栽培を手がけ、高工賃を実現している〈特定非営利活動法人ピアファーム〉理事長・林博文さんです。

特別賞は、90歳を迎えられた俳壇の大家・花田春兆さんに贈られました。

■精神障がい者だって働きたい！

精神障がい者の福祉作業所での

勤務を通じて、西谷さんはある確信を抱きました。「彼らには働くことが必要であり、それが一番のリハビリになる。自信を取り戻すきっかけになる」

しかし当時、精神障がい者は福祉の範疇ではなく医療の問題として取り扱われる時代。精神障がい者が働くこと自体、タブー視される風潮にありました。

それでも西谷さんの熱意は冷めることなく、次第に周囲の理解を獲得し1994年、念願の共同作業所「パイ焼き窯」を開設。それがやがて〈社会福祉法人はる〉へとつながります。

現在では第2の作業所「パイ焼き茶房」、クロネコDM便配達や清掃作業などを行う世田谷唯一の就労支援A型事業所「しごと」やグループホームの運営のみならず、福祉の仲間、医療や行政、市民をも巻き込んだネットワークづくりに力を注ぎ、地域の連携にも欠かせない存在です。

瀬戸 薫理事長は、当時は高級住宅街に作業所を開設するのにパイオニアとしてのご苦労があったのではないかと西谷さんの功労





「今日、東京に来ましたら頭が痛くなりました。東京の空気が合わないんですね。(笑) やっぱり田舎がいい。可能性はまだいくらでもあると思っています」林博文さん

「障がい児教育の草分けとして知られる田村一二氏の『賢愚和歌』『流汗同労』を、現代に実践しているのが林さん」林さんを推薦した、社会福祉法人ほつと福祉記念会 福島県被災地における障害福祉サービス基盤整備事業アドバイザー派遣事務局・統括コーディネーターの山田優さん



厚生労働省 社会・援護局 障害保健福祉部障害福祉課長の田中佐智子さん



卒寿を迎えた花田春兆さんに特別賞が贈られました



を讀えるとともに「世田谷産のリンゴを使ったアップルパイの美味しさもさることながら、地元のものを使って地元にくす姿勢に感心しました。また、仕事の評価も客観的な基準がしっかりできており、利用者も次なる目標を持ちやすいのではないかと評しました。

■高い給料を出すための農業経営

西谷さんの都会型の事業展開とは好対照を成すのが、福井で耕作放棄地の再生を通じて、障がいの自立に挑む「特定非営利活動法人ピアファーム」の林さんです。

農業で高い給料を出すことを最大の目標に据え、それまで勤務していた社会福祉法人から10名の利用者、3名のスタッフとともに

2008年に独立分社。以来、果樹栽培に取り組んでいます。果樹は、一般的な野菜にくらべ栽培に手がかかるものの、販売単価を高く設定でき、収益を上げやすい点に注目したのです。

地元あわら市はかねてよりナシの栽培が盛んな地域でしたが、多くの地方と同じように後継者不足で耕作放棄地が増え、荒れた農地が目立っていました。ナシ栽培はそんな地域への貢献も果たしており、まさに「してもらう福祉」から「地域に貢献できる攻

めの福祉」への転換です。

福井(北陸農政局管内)ではNPO法人初の「認定農業者」の承認を2011年に取得。福祉の延長で農業に携わるのではなく、あくまで農業の一環に障がいの活躍の場をつくるという姿勢に徹し、平均月給5万円以上を実現しています。

「障がいの者が4、5人で肥料を入れる作業を拝見しましたが、職員の方の手伝いなしで行っていたことに驚きました。作業は膨大なはずですが、みなさんにこやかに仕事を励んでおられました」と、瀬戸理事長は訪問時の印象を語りました。

■花田春兆さんに特別賞！

「我々の小倉昌男賞にはなくてはならない人です。春兆さんは言葉の魔術師ではないかと思えます。俳句を詠みますと、まぶたの裏にわあっと情景が浮かんできます」

特別賞に輝く花田春兆さんは、昨年10月に90歳、卒寿を迎えられました。俳句に加え日本文化の研究にも深く功績を残し、その仕事ぶりは偉業と呼ぶにふさわしいもの。小倉昌男賞では毎年、受賞者にお祝いの俳句を詠んでいただきました。今年はご自身も受賞者の一人。奥様の遺影とともに式に臨まれました。

3名の受賞者に賞状ならびに正賞として、母子のブロンズ像「愛」が贈呈される度に、会場は拍手で満たされました。

受賞者を訪ねて

お菓子で社会参加・ 社会復帰の道を拓く

精神障がい者が地域で暮らしていくために、
様々なしくみを展開してきた西谷さんを訪ねました。

社会福祉法人はる
常務理事
西谷久美子さん

「パイ焼き窯」は、 やり遂げることを重視

社会福祉法人はるの各部門は、
利用者に必要なリハビリに合わせ
て選択できるように仕事工夫され
ています。「パイ焼き窯」の菓
子班では、ひとつのレシピについ
て材料の計量から成形まで一人で
担当し、最後まで責任を持って仕
事をします。分業ではないので対
人関係が苦手な人も、落ち着いて

作業しています。おのずと焼き上
げたお菓子の出来具合が自分自身
の振り返りとなって仕事に対する
基本的な力がつくように工夫され
ていました。

くつろげる雰囲気も 就労支援の工夫のひとつ

東急大井町線の尾山台駅そばに
ある「パイ焼き茶房」は、客席の
空間を広くして、お客様がゆつく

DATA

社会福祉法人はるの理念

「語る」「創る」「暮らす」を基本に私た
ちは、働くことを通じて自己の誇りと自分
らしい人生を取り戻し、周囲（ハタ）の
人と共に楽しく生きることを実践し、障害
の有無を越えて生きる楽しさを共有でき
る社会や地域づくりを目指します。

平成26年度実績

社会福祉法人はる	
（パイ焼き窯・パイ焼き茶房・しごと）	
売上	8085万7426円
給料支払総額	4046万3148円
月額平均給料	2万5086円
	134名/月

地消を楽しむことができます。

クロネコDM便の配達が 自信をつける

会社などで働くことよりも安心
して仕事をしたいと考える人に働
く場を提供している「しごと」
主な業務はクロネコDM便配達や
清掃業務などを行っていて、一人
暮らしを実現できている人もいま
す。室内にはクロネコDM便配達
のためにしつらえた仕分け棚があ
り、生産性が高まる工夫もされて
います。ヤマト福祉財団の「障が
い者のクロネコDM便配達事業」
を開始する際には、リーフレッ
トやポスターに「しごと」のみ
なさんが登場しました。「この街
で、一緒に生きていく。」という
言葉は「しごと」のみなさんか
らイメージしたものです。

静かに佇むグループホーム 「とどろきの杜」

リハビリテーションの重要な柱
のひとつが、一人暮らしのトレ
ーニングです。グループホーム「と
どろきの杜」では、3年間の入居
期間の間に暮らしのリズムを整え
て、生活保護申請や賃貸アパート
の契約なども支援してもらい、ひ
とりずつ巣立っていきます。交流
室はまるで家庭のリビングルーム
のようで、一人暮らしの不安を解
消できるようになっています。
障がいのある人の回復を支えて
「働くこと」を通してきめ細やか
な仕組みを備えた社会福祉法人は
る。「働くこと」によって得られ
るものを大切にしながらも、障が
いのある人を支援する視点とはと
てもやさしく感じられました。



「とどろきの杜」の交流室で、グループホーム管理者小松原真奈美さんの説明を受ける。少しずつ利用者のできることが増えるとき、支援者としてやりがいを感じるそうです。



「パイ焼き茶房」のスタッフと西谷さん。「パイ焼き窯」のショートケーキが並んでいます。



「パイ焼き窯」の作業室は、個々に作業できるようにテーブルが配置されています。



一番人気は、世田谷産のリンゴを使ったアップルパイ。大きさでも人目を惹きます。



「しごと」の仕分け作業室で管理者の臼井崇晃さんから説明を受ける瀬戸理事長。配達順序の計画が立てやすいようにテーブルが配置されています。

受賞者を訪ねて

地域に残った障がいのある人が暮らし続けていくために

障がい者の賃金向上のため、果樹園再生で実績をつくった林博文さんを訪ねました。

特定非営利活動法人
ピアファーム
理事長
林 博文さん

美しい坂井北部丘陵地に広がる果樹園

福井県あわら市の小高い丘陵地にピアファームの果樹園があります。周辺には、森が広がっていますが、そこかつては農地だったところだそうです。ピアファーム

はそんな荒れた農地を再生して果樹園の拡大をしてきました。農水省の「認定農業者」を福井県（北陸農政局管内）のNPOとして最初に取得し、福祉的な経営から脱却して本格的な農業経営の道をたどっています。

DATA

特定非営利活動法人ピアファーム経営理念

- 1 働くこと、学ぶこと、かかわることを大切にしていきます
- 2 地域の人たちと共に農業の振興、活性化を図ります
- 3 良質で安心安全な商品（梨・ブドウ・野菜）づくりをめざします

平成26年度実績

ピアファーム	売上	7320万円
	給料支払総額	971万4000円
	月額平均給料	4万474円
産直市場	売上	7330万円
	給料支払総額	120万4000円
	月額平均給料	5万183円



梨の木の周りに円を描くように堆肥を入れていきます。

農業に必要な人手とは

果樹園は年間を通じて管理する必要があります。収穫後にまず行うことは、降雪するまえに梨の木に堆肥を入れること。675本の梨の木の一つひとつへ丁寧に堆肥入れを行います。一輪車で完熟堆肥を運びこみ、レーキで周囲に広

梨園とハウス葡萄合わせて33875㎡（約1万坪）の広さに初夏から晩秋にかけて収穫が続くように梨12種・葡萄22種が計画的に栽培されています。訪問した11月は、収穫も終わり、翌年のための堆肥入れが行われていました。



広々としたビニールハウス：葡萄の木が広く枝を伸ばせるように、林さんは屋根を接続させた特別な構造にしました。



果樹園は丘陵地にあるため日の出から日没までたっぷり日光が射します。

産直市場で地域の生産者と消費者をつなぐ

ピアファームがスーパーの経営を引き継ぐことになったのは、超高齢化した地元住民のためです。

げる作業は、5人の障がいのある人が行っていました。これからは、葡萄の木115本の枝の剪定が始まります。営農規模が大きくなると効率が良くなる反面、季節の移り変わりに合わせた作業のため人手がより多く必要になってきます。林さんは、梨や葡萄という商品価値の高い作物を選び、人に見合った収入をあげることがめざしています。



訪問したときは、新米が入荷していました。特設コーナーを設けて、地元農家さんへの配慮に怠りはありません。



産直市場ピアファームの店内 開店直後から買い物客が訪れています。

「夢の果実」の実現を目指して

地域の人々と共に暮らすため、農業の活性化と振興という大役を担うピアファーム。地域の振興からさらに福井県の名産として梨や葡萄が「夢の果実」になっていくことが期待されています。

た。少しでも安く品物を提供するために地元農家の野菜や精肉店の肉を直接店頭に並べる産直形式とし、生産者や商店からも信頼されるマーケットを目指しています。障がい者も事業継続の柱として品出しや野菜の小分けなどの作業に追われていました。

受賞のことば

働くことは自分らしい生き方や 誇りを取り戻すための道筋

■心に染みこんだ言葉

現職に就くまえに、私はいくつかの仕事をしてきました。その折々で、障がい児とその保護者や仕事仲間から、社会人の心構えや生き方を教えていただきました。

やがて、働くことを通じて得た能力を「障がい者の暮らしに生かしたい」と思うに至りました。

公務員時代は児童福祉の分野で14年間働きました。入職式で組合委員長からいただいた祝辞は、

「私たちは誰のために働き、その人の幸福のために何をなすべきか。その仕事があるたの本来の仕事であり、それによってあなた方はプロと言えるのです」

その言葉こそ、私の仕事の原点。道に迷ったときには、そこに立ち返って方向を選んできました。

「どんなに重い障がいを持っている子どもでも、ともに遊ぶ仲間と生活環境を整えば、必ずその子なりの成長・発達がある」との確信を、仕事を通じて得た私は、おもいつきり働ける仕事を目標として区役所を退職し、現在の精神障がい分野で働きだし、まもなく25年の歳月が流れます。

■今の私に自信を持てる社会に

成人期の精神障がい者は何を求めているのだろうか？

ほぼ全員の方が健康でよく普通の社会人らしい暮らしを取り戻したいと願っている。

障がい児が異年齢の子ども集団の中で大きく成長したこと、自分自身が仕事をして成長した実感を感じ返し、働く場づくりが精神障がい者の願いに沿うものではないかと考えました。それからは何かに追い立てられるように障がい者の働く場をつくってきました。

共同作業所「パイ焼き窯」をつくった当時、精神障がい者の経済的自立支援を謳う作業所は、かなり異端の目で見られました。「働かせる」無理させる「再発させる」そんな方程式がこの世界では一般的でした。

過去に会った多くの精神障がい者は、発症前の良き時代を語り合い、過去の自分アイデンティティを見つけようとしているように見えました。そこには今の自分を語れない自信のなさ、そして未来への不安が私には感じられました。

しかし「パイ焼き窯」で見られる多くの利用者は異なります。昼休みの話題はお菓子づくりや調理の出来具合。まるで職人のような会話。まさに「今の私」で生きていたのです。

障がいを持つ人が、自分らしい働き方や生き方を選択できることは、獲得されるべき権利の回復です。障害者の権利条約が社会の隅々にまで浸透し、彼らから「暮らしが豊かに、生活が楽しくなった」という声を聞くまで、一生懸命前進することを天国の小倉昌男さんと会場のみなさんに誓います。

受賞のことば

メンバーやスタッフが 地域で輝く場をつくっていく

■果樹栽培のひらめき

私はもともと農業が嫌で福祉の道に入って35年です。当初は重い障がいを持つ方への支援・介護中心にやってきました。

本日、会場に私の関係者として同席されている松永正昭さんの「C:ネットふくい」で、1993年から働くことになりました。なぜかと言いますと、いろんなことをしてみたい自分もありましたし、狭い福祉の範囲にとらわれず学びたい気があったからです。

その当時の担当は福祉工場、A型の事業所をいくつもつくっていく仕事です。豆腐屋や餅屋、最終的に農業もやりました。その農業法人は、今もそちらで活動をつづけております。

そうしているうちに果樹栽培に着目したのですが、じつは果樹栽培は稲作とはかなり異なる農業です。一般的な農作物より何倍も手がかかる。それで「分社して挑戦したい」と申し出ますと、「よからう、やってみなさい」ということで、独立分社して「ピアファーム」を立ち上げ、現在の形になりました。だから、今の私どもがあるのも、松永さんのお陰と心より感謝しています。

■福祉自身も自立を

同じく同席されている山田直樹さんは農業用ハウスを扱っている福井ハウス株式会社の代表取締役社長です。ブドウはハウス栽培しています。雨の日でもできる作業を

確保するためでもあります。

彼には30枚、40枚と、と私たちに合ったハウスのために何遍も見積もりを書いてもらいました。障がいを持った人にとって安全で働きやすい環境をいかにつくるのか？そのために「明日、見積書持ってきて」と。無茶なお願いをしました。本当に感謝しております。

つぎに山口敏彦さんは良き相談相手で、福井県立嶺北特別支援学校「親の会」の理事をなさっており、じつはうちの法人の監査役でもございます。今日もこの会場に来ていただきました。

それから、スタッフの田嶋安希子さん、上田晃司さん。てきぱきと事業を動かしながら、今のピアファームをつくってくれました。

今年の売上は3億円に届くだろうと思っております。そうして得たお金は利用者の給料なり、運転資金として地域にまたまわっていく…。

これがこれからの福祉の姿なのではないか、事業で自立しながら、障がいを持った方もいっしょに自立していくということではないかと思っています。

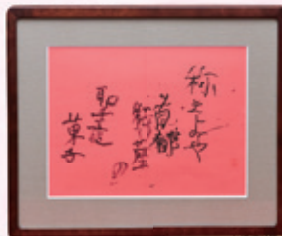
好きなことをやらせてもらっていますから、苦勞とは感じません。せっかく植えられた梨を託されたわけですから、土地を提供して下さった地域の方や福祉関係の方に感謝しながら努めてまいりたいと思います。

◎西谷久美子さんに贈られたお祝いの俳句

称えよや首都特産の聖夜菓子

花田春兆

社会福祉法人はるのパイ焼き茶房では、世田谷でとれたリンゴを使ったアップルパイを楽しむことができます。お店がある尾山台の駅前通りはイルミネーションが点灯し、クリスマスの華やいた雰囲気包まれています。



西谷久美子さん

社会福祉法人はる 常務理事

横浜市生まれ。資生堂本社（外国部）、品川区役所（児童部）を経て、1991年、精神障害者共同作業所「けやき工房」勤務。94年、世田谷区初の精神障害者の就労支援を目的とする作業所「パイ焼き寮」開設。2001年に「社会福祉法人はる」を創設。法的・制度的・社会的理解が遅れていた精神障害領域と、他障害との格差を埋める運動を積極的に展開。03年、グループホーム「はるの邑」開設。04年、「世田谷区精神障害者就労支援センター しごとねっと」開設。05年、利用者全員の最賃保障を謳う「しごととも」開設。06年に発足の「玉川 障害者地域生活支援機関連絡会」にも尽力。15年、指定特別相談事業「はるの相談室」開設。



◎林博文さんに贈られたお祝いの俳句

年用意人得てこそその梨・葡萄

花田春兆

ピアファームの果樹園は、とても広大です。675本の梨の木ひとつひとつへの堆肥入れがようやく終わり、これから、葡萄の木115本の枝の剪定が始まります。これができるのもみんなの力があればこそ。新しい年が楽しみです。



林 博文さん

特定非営利活動法人ピアファーム 理事長

1955年、福井県生まれ。78年、日本福祉大学福祉学部卒業。78年、社会福祉法人「希望園」に入園し、重度重複障害者の生活介護等に従事。93年、社会福祉法人「コミュニティネットワークふくい」入職。分場や事業所設立、事業部門の準備、雇用等の業務を担う。2002年、農業法人有限会社「シーネット坂井」の設立に参画。08年、独立分社して特定非営利活動法人「ピアファーム」を設立し、農業に特化した就労継続支援B型事業を展開。11年、北陸農政局管内では非営利団体として初となる「認定農業者」に、あわら市より承認。14年、廃業予定だったスーパーマーケットを引き継ぎ「産直市場ピアファーム」を開店。15年、観光ブドウ園「あわらベルジェ」をオープン。

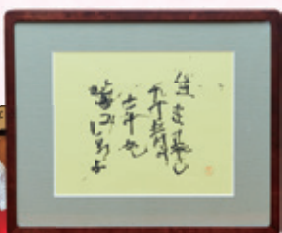


特別賞を受けて

昨年10月22日に90歳、卒寿を迎えられました花田春兆さんに、ヤマト福祉財団より8年ぶり、4人目となる「特別賞」が贈られました。

例年、小倉昌男賞受賞者にお祝いの俳句を贈呈されてきた花田春兆さんですが、この日ばかりは自らを祝う句をご披露。

受賞後のスピーチも三句でお気持ちを表すとともに「生きててよかったな」と一言、ユーモアあふれるコメントを発し、会場を沸かせました。



◎ご自身に贈られたお祝いの俳句
生きて来し卒寿の幸を噛みしめよ

◎スピーチ代わりの俳句
（代読：文筆家 坂部明浩さん）

まさにまさに卒寿祝の大朗報
生きて来し卒寿の幸に酔つ今宵
冬灯も燦今宵は祝杯受ける身ぞ

花田春兆



花田春兆さん
俳人

1925年、大阪府生まれ。本名・花田政国。出生時からの脳性まひにより歩行・起立障害、言語障害がある。34年、東京市立光明学校に入学。教師のすすめで俳句を始め、俳号「春兆」を受ける。47年、身体障害者による同人誌「しのめ」創刊。57年、俳誌「萬緑」に入会し中村草田男に師事。80年、国際障害者年日本推進協議会（現・日本障害者協議会）副代表（現在は顧問）。81年、内閣総理大臣賞受賞。82年、総理府障害者対策推進本部参画。97年、城西国際大学非常勤講師。

【著作】

句集「端午」「天日無冠」「喜憂刻々」。句文「折れたクレヨン・私の身障歳時記」「鬼気の人」「1981年の黒船-JDと障害者運動の四半世紀」ほか多数。

私たちの賛助会費が活かされています ■ 障がい者給料増額支援助成金

助成先レポート

Vol.

25

お客様にとって当たり前のお客様にとって当たり前

居心地のいいカフェであること

NPO法人「コミュニティワークス」 「Natural Cafe+Shop hanahaco」 千葉県木更津市 就労継続B型・生活介護

大学2年のときに指導教授の依頼で、縁もゆかりもない木更津市に移り住み、学生起業家として市民活動支援事業に挑戦した筒井啓介さん。当初3年間だった市との契約は10年つづきましたが、その10年間で筒井さんが知ったのは「障がい者雇用の場の少なさ」でした。

理想の施設を追い求めて

金曜の昼下がり、女性を中心にたくさんのお客様がくつろぐお洒落なカフェ。木更津駅から車で20分、緑多い小高い丘に建つのが

〈Natural Cafe+Shop hanahaco〉です。店内は落ち着いたトーンでコーディネートされ、有名セレクトショップに並ぶ雑貨も販売しています。

昨年3月に念願のカフェをオープンさせたのが、2006年から本格的に障がい者福祉に取り組む〈NPO法人コミュニティワークス〉です。建設費の一部を財団の助成で賄いました。

一つ目の事業所で受け入れる利用者さんが増加するにつれ、施設が手狭に。さらに障がいの種別や度合いもまちまちになると、精神障がいの方と、多動で賑やかな知的障がいの方が、同じ空間でいっしょにモノづくりをつづけるこ

とに困難が生じていました。

「そこでイメージしたのは、B型が仕事を回して売上をつくり、それを緩やかにサポートする生活介護にも分けることで、B型と、生活介護の給料も上げていく。そんな仕組みは何かと考えて辿りついたのが、さまざまな仕事で切り出せる飲食店だったんです」と、語るのは理事長の筒井啓介さんです。

専門家とうまくつきあう

市民活動支援をしていると、福祉の相談がたくさん舞い込みます。あるとき熱心な支援者からの頼みで、障がい者の職業指導を行う「職業親制度」の引き受け手になりました。

「二つ返事で受けたのですが、『障がい者の働く場がこんなにもないのか』と知ることになりました。同時に、地域で起業したい人の支援をしてきた経験が生かせるのではないと思いました」

NPOを立ち上げるのはお手のもの。すぐに設立し、共同作業所の認可も得ました。



hanahacoの利用者さんとスタッフ



調理の下準備にも、B型の利用者さんの姿が



開店準備にはまずお店の掃除から



「建築家、POP類のデザイナー、カメラマン、ブックセレクト、トータルデザインの専門家…。僕はただの経営者で具現化する力がない。お金はかかりますが、やはり専門家を頼ったほうが、お客様にとっていいものになるんです」と筒井理事長

みんなのカンパは あなたの身近で役立っている



●ヤマト運輸労働組合
千葉支部執行委員長
坂口伸一さん

ヤマト福祉財団の取り組みについては、自分自身かねてより強い関心があり、支部委員長になってからは助成金の贈呈式などに出席する都度、お聞きする施設の方のお話に共感するところがありました。

今日も筒井さんのお話からは、事業に込められた思いが伝わってきて、本当に感激しました。今日取材した内容は、支部の機関誌「アクアライン」でもご紹介したいと思っています。

これまで3回、支部委員長として夏のカンパに携わりました。2回目は1回目よりご協力いただける人数は増えたものの金額は下回りました。より広報に努めた3回目の昨年は人数・金額ともに前年を上回り、千葉支部の仲間たちにそれだけ共感が広がったのだと感じます。

自分たちの善意で提供した資金が、こうしたことに使われている事実をもっと知っていただいて、カフェへも訪れてもらえればと思っています。



この日のランチは、サバのみぞれ和え with 菜花とエノキの白和え。ヘルシーでボリュームもあるランチに坂口伸一委員長と千葉支部広報の正木邦政さんの顔もほころぶ



生活介護の利用者さんは、おしぼりのセット、物販データの管理、ユニフォームの洗濯などの仕事で店舗を支える



オリジナル商品の新聞バッグとスペインのお菓子・ポルポローネのパッケージ。菓子工房アントレの高木康裕シェフが監修し、絵本作家・村上康成氏のイラストがあしらわれている



併設のライフスタイルショップにはお洒落な雑貨が並び、いずれもフェアトレード商品か、全国の障がい者施設や地場産業を守る工房が小ロットで生産する、ストーリーを持ったアイテムを厳選



Cafe+Shop
hanahacoの責任者
初芝小百合さん

スタートは、安い内職に苦しみました。職員たちが試行錯誤の末、開発した自主商品（新聞バッグ）は、英字新聞をリサイクルしたもの。これが雑貨ブランドのラインナップに採用されると、モノづくりに稼ぐスタイルが確立しました。

内職からの完全脱却を目指して、つぎに目をつけたのがお菓子づくりです。またま当時、新聞バッグがNHKに採りあげられ、インタビュで利用者さんの給料が1万円台だと明かしました。現状を隠さず

訴えたかったからです。世間の反応を知りたかった筒井さんは、その後ネットで気になるツイートをみつけます。『これが福祉作業所の限界だ』福祉職員の力だけではなく、プロの力も使うべきだという冷静な

視線がそこには感じられました。調べてみるとツイートの主は、福祉コンサルタントのよう。著名なパティシエ、絵本作家とのコラボレーションをコーディネートしてお菓子商品の開発を手助けしている様子です。



サラダバー、毎朝利用者さんがつくる数種類のドレッシングも人気

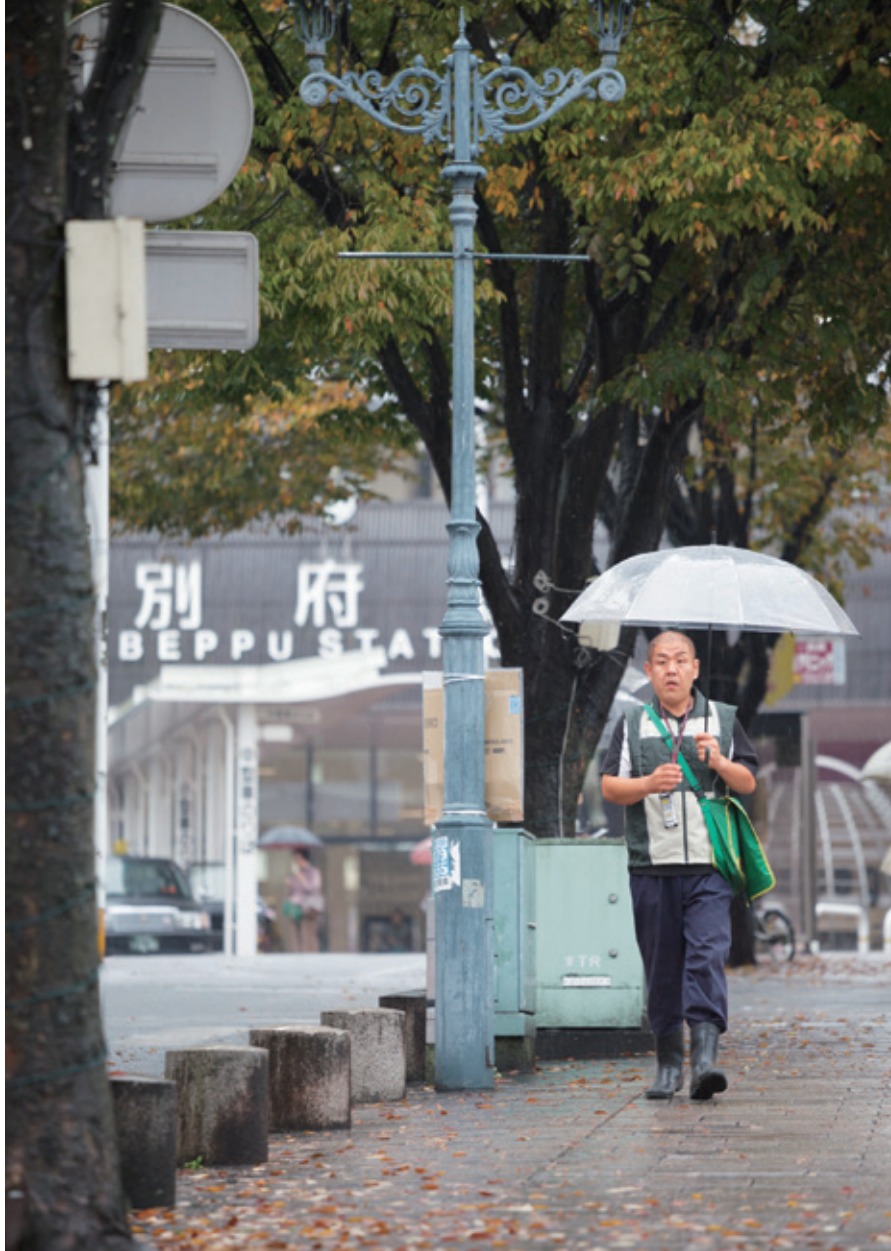
もっと前へさらに上へ

今回のカフェ出店でも、プロを上手に頼るやり方は遺憾なく発揮されました。

店のコンセプト策定には、職員のほか建築家やデザイナーを交えて2年にわたる社内ワークショップを開催。どんなお客様をお迎えたいのか、じっくり検討して意思統一を図りました。そのうえ店舗でお客様の目に触れる部分は、トータルデザインの専門家に例えなくチェックしてもらった徹底ぶりです。

「ここが障がい者施設かどうかはお客様にとって関係なくて、快適に満足してお帰りたいということが大事。ひいてはそれが売上につながり、利用者さんの給料に還元されるのですから」

現在、B型の平均月給は3万円に。それでも「目標とする売上はまだまだ足りていません」。策を思案する姿に、現状に甘んじない起業家精神を見ました。



メイトさんのリーダー、今村正孝さん。大分市に住んでいますが、別府市のことがすっかり詳しくなりました。夢は一人暮らし。

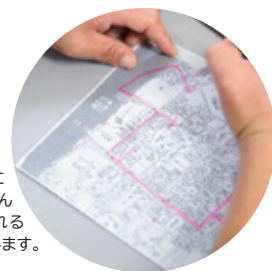
この街で、
一緒に生きていく。



公益財団法人ヤマト福祉財団
障がい者のクロネコDM便配達事業

歩いた距離だけ、 町にとけ込んでいく。

大分県別府市のJR別府駅から約5分。指定障害福祉サービス事業所メロディーは、駅周辺の商店街や住宅街にクロネコDM便を配達しています。仕分けからルート作りまでできるリーダーを中心に、3人のメイトさんが交代で4つの地域を担当しています。



配達先を地図にマーク。線で結んで、効率よく回れるルートを書き込みます。

慎重な確認が毎日の基本

「メロディー」がメール便配達（後にDM便配達）を始めたのは、2007年。社会福祉法人となり、もう少し仕事の幅を広げようとしていた時にメール便のことを耳にしました。ヤマト運輸から「町の人のふれあいがある仕事」という説明を聞いて、取り組む決断をしたそうです。配達地域は、別府駅周辺と駅から少し離れた山側までの、徒歩で回れる圏内。なだらかな坂と細い道が入り組む、昔ながらの温泉町です。

メイトさんのリーダーは今村正孝さん。9年目のベテランです。DM便は1日平均、約70冊。まず4つの地域に分けて、地図に配達先をマーク。配達ルートを作り、配る順番にDM便を並べます。地図を見ながら今村さんが配達先の名前を読み上げ、職員の津崎幸司さんが、DM便が配達順に並べられているのを確認します。このチェックは、毎日欠かしません。そして、今村さんは1人で、

配達先の飼い犬や猫も 顔なじみ

あと2人のメイトさんは職員と一緒に、毎朝、元気にスタートします。

今村さんは大きな建物から覚えていって、少しずつ地図を頭に入れていったそうです。しかし、配達を始めた当初は入り組んだ道がわからず、抜け道だと思って私有地を通り抜けてしまい、叱られたこともあったとか。今では地図をすべて把握。新しい職員さんに道を教えられるほど詳しくなっています。人なつこい今村さんは自分から元気に挨拶。町にもすっかりとけ込んでいます。しだいに飼い犬や猫とも仲良くなって、名前も覚えているほど。町の人が、「がんばって」と声をかけられるのがうれしいと話します。

●大分主管支店 別府石垣センター

面積6.3km²/人口24,391人/世帯数11,868世帯

●指定障害福祉サービス事業所メロディー

2007年からクロネコメール便配達（DM便配達）を開始。1日の平均配達数、約70冊。墓石の掃除、配送トラックやスーパーのカゴの洗浄、産直野菜の販売、シール貼りなど。

「障がい者のクロネコDM便配達事業」

参入施設数 319施設 従事者数 1,525人（2015年10月現在）

お問い合わせは……（公財）ヤマト福祉財団 DM便担当

TEL 03-3248-0691 FAX 03-3542-5165

<http://www.yamato-fukushi.jp/>

※ 2015年4月1日より、クロネコメール便配達はクロネコDM便配達へと変わりました。

能力を活かして、伸ばす

今村さんは薄いDM便がくつついていることに気づかず、2冊同じ場所に投函してしまったことがあったとか。しかし今では、職員と一緒に



メイトさんになって4年目の末松明洋さん(左)と9年目のベテラン今村正孝さん(右)。今村さんが末松さんをサポートして軒一軒丁寧に配っています。



「おはよう」「がばってね」といつも声をかけてくれるお肉屋さんに、渡辺健さん(右)が手渡しで配達。「DM便です!」という元気な声が響きます。

に確認を徹底することで誤配はほぼありません。また、メイトさんの末松明洋さんはビルに関心が高く、数字に強いという能力の持ち主。マンションなどで名字の同じ人がいるときは、下の名前や部屋番号を覚えていきます。その能力を活かして、集合住宅が多い地域を担当しています。もう一人のメイトさんの渡辺健さんは、いつもニコニコしている笑顔の人。最初は話しかけられても、返事ができずにドギマギしてしまったそうですが、今では明るく対応できるようになっています。

「一人一人何ができるかを考えて、その能力を活かすことが大切です」と舩田敬行施設長は話します。

じっくり分析してから、仕事を提案

「メロディー」では工賃アップのために、DM便配達のものにもいろいろな事業を請け負っています。

「私も含めて職員のほとんどがコンピュータ業界出身者。そのせいか数字に基づいた、効率のよい仕事を提案するのが得意です」と舩田施設長。ある仕事は施設の利用者さんに向いているのではないかと考えると、仕事の内容を徹底的に分析するそうです。

たとえば、スーパーの買い物力ゴ洗浄の仕事。「まず、何人で何分か



仕分けは、今村さんの担当。毎朝、手際よく進め、あっという間に完了します。



真剣な顔の渡辺さん。雨の日はDM便が濡れないように奥まで入っていることを確認。毎日の配達を楽しんでいると話します。北海道旅行が夢。



メロディー職員の津崎幸司さん(左)と渡辺さん(右)。「いつか今村さんのように一人で配れるようになりたい」と渡辺さん。

かるからいくら、と予算を出します。

そして、現状の器械洗いと私たちの丁寧な手洗いを比較して、私たちの方が衛生的でクオリティの高いことをデータで示します。その上で、私たちにやらせてほしいとお願ひすると、たいいていの場合、相手は他と比べて安いと感じるようです。「これは、私たちがあなたの会社のムダなコストを減らしてあげますよ、という提案でもあります。仕事を広げていくためには、事前調査と徹底的な分析が必要です。これからも、仕事をする中で一人一人がいきいきと人生を歩めるように、サポートしていきたい」と舩田施設長は熱く語ります。

信頼できる仲間 さらに関係を深めたい

ヤマト運輸大分サービスセンター加藤俊二センター長は「ミスが少なく、笑顔で配達し、町にとけ込んでいる。地域で一番愛される企業をめざすヤマト運輸としては、願ってもない仲間です」と話します。

ヤマト運輸別府石垣支店 榎隆雄支店長は「確実で丁寧な仕事ぶり、信頼感が高い。さらに仕事の関係を深められるよう考えていきたい」と期待を込めました。

「メロディー」のメイトさんたちは、町の人や、犬や猫とも挨拶を交わしながら、今日も笑顔と元気を配達しています。



前列向かって左から／メロディー職員 津崎幸司さん、末松明洋さん、今村正孝さん、渡辺健さん
後列向かって左から／ヤマト福祉財団九州支部 澤井良司事務長、ヤマト運輸大分サービスセンター 加藤俊二センター長、ヤマト運輸別府石垣支店 榎隆雄支店長、メロディー職員 越智克己さん、メロディー職員 舩田美子さん

「大分県内にある障がい者支援事業所の中の16施設に呼びかけて、共同で実施しているのが、霊園の墓石の清掃。「メロディー」も含めて、それぞれの施設がその周辺の霊園を担当することで、16のすべての施設に仕事が増えました。これは自分の施設のことだけではなく、大きな視点で考えるという新しい発想で生まれた仕事。私たちが提案した金額で契約することができて、全施設の工賃アップにつながっています」と舩田施設長は話します。



水稲自然栽培での初収穫へ戸惑いながらも一歩ずつ前進

10月10日、愛知県豊田市にある無門福祉会が稲刈りを行いました。あいにくの曇り空でしたが、秋風にそよぐ黄金色の稲穂を見ると、自然に笑顔がこぼれてきます。応援に駆けつけてくれた周辺農家、家族で参加されたボランティアなど、大勢の方が一緒に作業を開始しました。

「私たちは30年近く農業を行っています。水稲自然栽培は初めての試みです。じつは農業の収益がまったく上らず、売上も年間でわずか5万円。もう止めてしまつてはという意見も出ていました。そんな時、佐伯さんのお話を聞き、水稲自然栽培なら給料増額に結びつくのではと考えたのです。肥料を与えない、疎植にするなど、これで大丈夫だろうかと不安になることもありましたが、それでも、豊かに実つた穂は重く垂れ下がり、次に強風が来たら倒れてしまうのではと心配するほど立派に育ってくれました」と磯部電太事務局長は話します。

周りの農家が驚くほど太く立派な株の稲穂に成長

その稲穂は、いろいろな田んぼを見てきた佐伯さんも「2000点満点の実りですね」と評価するほど。近隣の農家の方は「肥料を与えていないのに1本の株がこんなに太く大きく育つなんて」と驚いています。

「肥料を与えないことで、根が養分を求めて深く強く張り、大きく育つ

ていくのです。土の硬い部分が深い田んぼと浅い田んぼで、根の張り具合も変わってくることを知りました。今年は2度台風が来ましたが、強い根のおかげでうちの稲は負けませんでした」。

与えられるだけでなく利用者自らが考え作業を開始

無門福祉会が水稲自然栽培を行った田んぼは約4反。今年の収穫量は約1350kgで、利用者一人当たり約1万6800円の給料アップができる計算になりました。

「水稲自然栽培では、草むしりや害虫対策、水の管理など、日々こまめに対応すべき作業がたくさんあります。利用者さんは、それぞれ自分にできる仕事を担当していきましました。凄いなと感じたのは、苗が育っていく過程で利用者さんが作物を育てる面白さを肌で感じ取り、こちらが指示する仕事だけでなく、自ら草をむしる、休日田んぼをパトロールするなど、自分たちにできることを考え、自発的に動きはじめたことです」。

そんな姿を見た周りの農家の方は「頑張っているね」と気軽に声をかけてくれるようになりました。

しかし、すべてがうまくいったわけではありません。アオミドロが発生したり、カメムシやイナゴの被害も受けました。

「まだまだ勉強しなければならぬことは山ほどあります。来年は、法人全体で水稲自然栽培に取り組み、倍の面積に田んぼを広げ、より成果を上げたいと思います」。

障がいのある方が農業再生の原動力に

無農薬・無肥料・無除草剤の水稲栽培で、利用者の仕事の拡大と給料アップを目指す、それが『水稲自然栽培チャレンジ』です。昨年4月、このプロジェクトに参加した四つの施設は、田んぼづくりや育苗など、自然栽培独自の方法を学び挑戦を続けてきました。そして昨秋、自然の恵みと利用者の愛情をたくさん吸収し、すくすくと成長した稲穂は、無事に収穫の時を迎えました。

自然栽培の田んぼでは多くの命が共生している

11月3日に行われた作業所おもやの稲刈りは、これまで協力いただいた方への感謝を込め、収穫祭というイベントになりました。前日の雨で田んぼに多少のぬかるみはありますが、収穫を祝うように、午後からは気持ちよく晴れてきました。お昼ご飯には、オモヤキッチンが、利用者が自然栽培で育てた野菜を豚汁にして振る舞い、あちこちで笑い声、歓声があがるにぎやかな稲刈りになりました。

「しっかりと実がつまつた立派な稲穂に育ちました。昨年、育苗に失敗したこともあり、不安と期待が入り交じりながらの作業でしたが、みんなよくがんばってきたなと、いまは胸がいっぱいです」と話すのは杉田健一施設長。

耕作放棄地を借り受け、小山がでけるほどの雑草を刈ることからスタート。佐伯さんのアドバイスで育苗も無事に成功し、田植えも順調に終わりました。

「田植えの後は、毎日が雑草との戦いでした。朝5時、1人で田んぼに出て草取りをしていると、日の出とともに何千匹のトンボが一斉に飛び立つのです。トンボは卵を産み、ヤゴが生まれ、それが羽化していく。ああ、この田んぼでは稲だけではなく、いろいろな命の営みがある、それだけ豊かな土地なのだと実感しました」。

だれが主役になれるそれだけたくさん仕事がある

土、水、草、虫などに関わる自然相

手の仕事ですから、なにかもマニュアル通りとはいきません。

「水温が低く水の管理がうまくいかない、気がついたらゾウムシが大量に発生していたなどの問題も発生しました。でもそこから新しい仕事も広がったのです。たとえば、田んぼに出ることができない利用者さんは、芽が出たばかりの苗を食べにくるスズメを追いかつ仕事を担当しました。たくさんある仕事の中から、自分の得意な仕事を、自分が主役になれる仕事を見つけていくことができる、これも自然栽培のよいところですね」。

みんなで共働すればどんな困難も乗り越えられる

今回の収穫量は、はぎ掛けしてある分も含めて約1080kg、売上を計算すると月約30000円の給料増額が見込めそうです。

「この収穫量では、利用者が満足できる給料には到達できません。もっと効果的に成育できる工夫をして、収穫量を上げていきたい。佐伯さんから、田んぼに傾きがあり、低い部分に水が溜まりやすいので水のコントロールが大切だと教えられましたので、稲刈りの後、田んぼをよく乾燥させて来年の準備を進めています。来年は新しい田んぼを5反借り約2倍に増やす計画です。今回、私たちは職員も利用者も関係なく、みんなで力を合わせていろいろな困難を乗り越えてきました。共働する強さを知った私たちなら、きつと目標を達成できると信じています」。





参加した子供たちをコンバインに乗せて一緒に稲刈り



左が無門福祉会で育てた稲。分けつを繰り返し根が太く長くなっている



稲を刈る手応えも十分に太く立派に育った



視察に訪れた瀬戸理事長と磯部さん(左)



まさに頭を垂れるほど豊かに育った稲穂



プロジェクトリーダー
佐伯康人さん

耕作放棄地を福祉施設が自然栽培で再生する、これが成功すれば日本の農業も福祉も変わっていく、とプロジェクトリーダーの佐伯さん

※水稲自然栽培チャレンジとは… 休耕田・耕作放棄地で水稲自然栽培による高付加価値のお米を育成・販売し、施設で働く障がい者の収入につなぐモデルを実証するプロジェクトです。参加施設には、第15回小倉昌男賞を受賞した(株)パーソナルアシスタント青空 代表取締役の佐伯康人さんがプロジェクトリーダーとなり水稲自然栽培のノウハウを指導。ヤマト福祉財団は、参加施設が耕運機・田植機・コンバインなどを購入・レンタルするための費用、またプロジェクトリーダーの派遣費用などを支援しています。



刈り取った後を見ると太く育った株からいくつにも枝分かれしていることがわかる



稲刈りした一部は、品質よく保存できるよう天日で乾燥させる「はざ掛け」に



これを自分たちが育てたと自信満々に稲穂を掲げる利用者



近隣農家や地元の仲間、家族も参加



正面から朝日があり、命の営みを見せてくれるおもやの田んぼに訪れた爽やかな秋



利用者、職員、そして近隣の方もみんなで力を合わせて稲刈りを完了



こんなに大きく育つのかと、稲刈りを手伝った近隣農家の方も驚くほど

『水稲自然栽培チャレンジ』 検証報告会



利用者の成長した姿と収穫の手助を報告する水稲自然栽培チャレンジの参加施設



検証報告会の翌日は厚生労働省で開催した「農福連携マルシェ」に参加

はじめての挑戦ということもあり、2年間の検証期間を予定していましたが、参加施設は順調に成果を上げること成功。予定を繰り上げ11月9日に検証報告会を開催しました。

ゆめサポート・バクは「利用者6名と2反弱の田んぼで挑戦。自然栽培は、最初だけ手をかければ後は勝手に成長してくれるイメージでいましたが、想像以上に大変でした。でも、利用者の楽しそうに働く姿と、すくすくと成長する稲穂を見ていると、苦労もすべて吹き飛びます」と報告。

レストランを運営する六丁目農園は「水が冷たい土地で水管理が難しく、またいもち病の心配もありましたが、収穫までこぎ着け、その品質を周りの農家にも認めていただきました。地元の方からは、レストランと自然栽培で地域復興に手を貸してほしいと声をかけられ、早速、動き出しています」と次の計画についても報告しました。

各施設の頑張りを見守り、アドバイスを続けてきた佐伯さんは「お米はもちろん、その土地に合った野菜や果物を自然栽培でつくり、みんなでネットワークを構築して全国販売できれば成果はより拡大していくと思います。日本の農業の再生を、障がいのある方の手で実現していきますよ」と呼びかけました。

翌日は、農林水産省と厚生労働省が共催する「農福連携マルシェ」にも参加。収穫したお米や野菜の直売を行い、大きな手助えを得ることができました。

今後、ヤマト福祉財団では、水稲自然栽培チャレンジにより多くの施設が参加できるように体制を整え、また佐伯さんが推進する「自然栽培パーティ」のブランドを全国展開していく支援を同時に進めていく計画です。

● 定量集計結果

	栽培面積	収量	予定価格 (キロ単価)	収入見込み	作業人数	増額予想の給料 (1人当たり月額)
(社福) 無門福祉会(愛知県豊田市)	45a	1,350kg	600円	810,000円	3	16,781円
(株) アップルファーム福祉事業所六丁目農園(宮城県蔵王町)	35a	900kg	800円	720,000円	3	20,000円
(社福) 「ゼノ」少年牧場ゆめサポート・バク(広島県福山市)	18.5a	450kg	500円	225,000円	6	3,125円
(NPO) 緑活作業所おもや(滋賀県栗東市)	40a	1,080kg	600円	648,000円	18	3,000円
合 計	138.5a	3,780kg	635円	2,403,000円	30	6,675円

※(同) ソルファコミュニティ(沖縄県北中城村)、障がい者福祉施設さんすまいる伊都(福岡県糸島市)、(社福)「ゼノ」少年牧場 JOB プラスはんど(広島県福山市)の3施設が新たに参加することになり、検証報告会に出席しました。



来年はもっと田んぼを広げるぞ、収穫の喜びはさらなる挑戦意欲につながっていく



応援に駆けつけた仲間と、豚汁・ごはんで昼休みのひととき

クロネコDM便配達本人による特別報告会

現在、319カ所の施設で約1500名の障がいのある方々がクロネコメイトとしてクロネコDM便配達に従事しています。そのなかから地元での「クロネコDM便配達本人による特別報告会」の開催を希望する施設を公募し、2施設が報告会を開催しました。

NPO法人ボランティア仲間九州ラーメン党
就労継続支援B型事業所
そよかぜ福祉作業所
熊本県上益城郡益城町



そよかぜ福祉作業所は10月15日に益城町文化会館で報告会を開催しました。大規模な報告会にしようと、告知チラシを折り込みしたり手配りでまき、当日は220名の方が集まりました。

クロネコDM便の配達で努力していること、苦労していること、うれしかったことなどを4人が発表。配達のとぎに地域の方が声をかけてくれたり、顔を覚えてくれたりすることが仕事のやりがいにつながっていると報告しました。

そよかぜ福祉作業所は交代で休みをとり、休日や祝日もクロネコDM便の配達をしています。

地域の方々の笑顔や挨拶に励まされながら、これからもこの仕事を続けていきたいとの言葉に来場者は温かな拍手を送っていました。

NPO法人いろえんぴつ
心理福祉コミュニティズ
地域活動支援センターいろえんぴつ
神奈川県横浜市港北区



いろえんぴつは11月12日に港北区社会福祉協議会で66名の来場者を迎え、報告会を開催しました。

当日は13名のクロネコメイトさんが、インタビュー形式で日々の配達の様子を報告しました。

いろえんぴつは、2地区のクロネコDM便を担当し、午前と午後に分け、徒歩で配達しています。毎日同じ時間に同じ道を通り配達することで、だんだんと地域の方に顔を覚えてもらい、声をかけられるようになっていったそうです。

鳥や花を観察しながら配達するなどの毎日の楽しみや、DM便配達での苦労ややりがいについて、それぞれの言葉で発表し、来場者は熱心に耳を傾けていました。

「夢へのかけ橋 実践塾」活動報告



二つの新塾を担当する4人の塾長と挨拶を行う瀬戸理事長



一つでも多く課題を持ち帰りたいと熱心に聞き入る新塾生たち

新しい体制で二つの新塾がスタート

昨年10月2日・3日、秋から新たにスタートする二つの「夢へのかけ橋 実践塾」の開講式を行いました。

その一つは新塾塾長、亀井塾長、そして熊田新塾長の3人の塾長が、15名の塾生それぞれに目指す事業形態に応じたアドバイスに適宜行う協働体制の塾です。もう一つは、武田塾長による5万円必達塾。ここには、夢へのかけ橋実践塾を卒業した5施設が「2年間で必ず利用者の給料を5万円以上にする」という新たな決意を持って改めて参加しています。

瀬戸理事長は「塾長をはじめ多くの先輩たちの成功例をたくさん学び、彼らがどのようなマーケットに着目し、どのような商品を持って差別化を図っているのか、それをじっくりと読み取ってください」と挨拶。

さらに武田塾長より「なぜ給料UPか」「東京学芸大学の菅野 敦教授より「知的障がい者の職業能力向上について」の講演が行われました。20名の新塾生たちは、これから2年間で取り組むべき課題と方法をつかもうと、真剣な面持ちで聞き入っていました。



それぞれの弁当容器を持ち寄り検討する楠元塾生の塾生



残り1年で全員が目標達成を話す楠元塾長

楠元塾の塾生が1年間の成果を発表

開講式と同時に行われた合同研修会で、楠元塾9名の塾生たちが中間報告を行いました。

試行錯誤の末、この夏にやっと弁当・配食サービスを開始し、1日70個を超える販売数と上々のスタートを切った塾生。1日わずか3個程度の販売数だった厳しい状況から営業努力が実り、いまは70個近くに、三桁の販売数も見えはじめたという塾生。すでに1日220個を超え、後1年で350個、月額平均給料5万円の目標を達成すると報告した塾生など、それぞれの成果と今後の目標を次々と発表しました。

分科会ではそれぞれが使っている弁当容器を持ち寄り、見映えとコスト削減を同時に満たせる容器についても検討しました。

楠元塾も後1年を切り、全員が給料増額のゴールに到達できるように一つずつ問題解決を進めています。



Information of the Art

ジョルジョ・モランディ ——終わりになき変奏——



《静物》1946年 国立近代美術館（ローマ）
©Roma, Galleria Nazionale d'Arte Moderna e Contemporanea, by permission of Ministero dei Beni delle Attività Culturali e del Turismo

《花》1952年 ミラノ市立ボスキ・ディ・ステファノ美術館
©Comune di Milano - Casa Museo Boschi Di Stefano



《フォンダツツア通りの中庭》1954年
モランディ美術館（ボローニャ）
©Sergio Buono



《静物》1951年 モランディ美術館（ボローニャ）
©Sergio Buono

開催期間▶2016年2月20日（土）～4月10日（日）
休 館 日▶毎週月曜日（ただし3月21日は開館）、3月22日（火）
開催場所▶東京ステーションギャラリー
アクセス▶JR東京駅 丸の内北口改札前
開館時間▶10:00～18:00
※金曜日は20:00まで開館
※入館は閉館の30分前まで

観 覧 料▶

	一般	大学生・高校生
当日	1100円	900円

※20名以上の団体は100円引き

※障がい者手帳等持参の方は100円引き、その介添者1名は無料

主 催▶東京ステーションギャラリー（公益財団法人東日本鉄道文化財団）、東京新聞

学術協力▶ボローニャ市立美術館博物館機構 モランディ美術館
With the collaboration of the Istituzione
Bologna Musei | Museo Morandi - Italy

後 援▶イタリア大使館、イタリア文化会館、ボローニャ市

協 賛▶大日本印刷

協 カ▶イタリア・イタリア航空

問い合わせ先▶TEL 03-3212-2485

ホームページ:

<http://www.ejrcf.or.jp/gallery/index.html>

巡回情報▶兵庫県立美術館 2016年2月14日（日）まで開催中

岩手県立美術館 2016年4月16日（土）～6月5日（日）

本展の美術品取り扱いにヤマトロジスティクス株式会社は協力しています。

モランディは同じような配置の静物を繰り返し描くことによって微妙に異なる絵画を複数残しています。この「繰り返し描くこと」が「シリーズ」であり、「微妙に異なる絵画」が「ヴァリエーション」です。声高な主張や強調を排した静謐な筆致は、そのわずかな違いによって見る人の想像力を掻き立てます。一見単調に見える作品は、瓶や容器という日常のモチーフを、配置しては置き直し、また組み換えるという試行錯誤を経て描かれたものであり、シリーズの各々がまったく別の作品として完成しているのです。本展では具象と抽象の間に揺れ動いた彼の作品を具体的な作例で示してみなさまに楽しんでいただきます。

「シリーズ」と「ヴァリエーション」

20世紀イタリアを代表する画家、ジョルジョ・モランディ（1890～1964）。生涯のほとんどを生まれ故郷のボローニャで過ごしています。1907年にボローニャの美術アカデミーに入学。卒業後に美術教師の職を得て1929年まで続けます。この間に知り合ったのが、ジョルジョ・デ・キリコやカルロ・カッラなどです。彼らから影響を受け、「形而上派」と呼ばれる絵画を制作するようになります。独自のスタイルである静物画を描くようになるのが1920年頃。1930年には母校である美術アカデミーの教授となり、1956年に退職するまで絵画や版画で数々の賞を受賞するなど名声を確立し、1957年にはサンパウロ・ビエンナーレの絵画部門でジャガールをおさえて大賞を獲得しました。

ご協力ありがとうございました



スワンのクリスマスケーキ

昨年12月に販売したスワンのクリスマスケーキは一昨年を上回る11万3946個の実績をあげることができました。全国のヤマトグループのみなさま、いつもご協力ありがとうございました。

これからもみなさまに喜んでいただける商品の開発を心がけていきます。
ありがとうございました。

株式会社スワン

つたわる
フロント
読みやすさを追求した書体

